

現代俳句全集 六

俳句全集

六

福永耕二

福田甲子雄

広瀬直人

原裕

林田紀音夫

中村苑子

友岡子郷

立風書房

現代俳句全集 6



1978年3月5日 第1刷発行

¥ 2500

現代俳句全集 六

著者代表 友岡子郷

装幀者 前川 直

発行者 下野 博

発行所 立風書房

東京都品川区東五反田三―六―一八

TEL (〇三)(四四七) 一一九一 振替 東京五―七四四九三

印刷所 信毎書籍印刷株式会社 / 株式会社美術版画社

製本所 大口製本印刷株式会社

乱丁本・落丁本はお取替いたしません。

Printed in Japan 1978 © 0392-R&A06-8909

無断複製 (コピー) を禁ず。

目次

友岡子郷集……………7

遠方 『遠方』以後 自作ノート

●柔軟な感性(友岡子郷の俳句)——高柳重信 38

中村苑子集……………43

水妖詞館 花狩 自作ノート

●「非時」の世界の消息(中村苑子の俳句)——大岡 信 72

林田紀音夫集……………79

風蝕 幻燈 『幻燈』以後 自作ノート

●屈折した思い(林田紀音夫の俳句)——高柳重信 109

原 裕集……………115

葦牙 青垣 新治 自作ノート

●原 裕の行方——飯田龍太 145

広瀬直人集……………149

帰路 日の鳥 自作ノート

●自然を押ししてその窓をひらく(広瀬直人の俳句)——大岡 信 179

福田甲子雄集……………183

藁火 青蟬 『青蟬』以後 自作ノート

●甲斐の空(福田甲子雄の俳句)——高柳重信 212

福永耕二集……………217

鳥語 『鳥語』以後 自作ノート

●晴朗と節度と(福永耕二の俳句)——飯田龍太 247

宮津昭彦集……………251

積雲 来信 『来信』以後 自作ノート

●恒心の旅懐(宮津昭彦の俳句)——飯田龍太 283

森田 峠集……………287

『避暑散步』以前 避暑散步 森田 峠集(自註現代俳句シリ

ズ) 『避暑散步』以後

●無事の人（森田峠小論）——森 澄雄 316

鷺谷七菜子集……………321

黄炎 銃身 花寂び 自作ノート

●鷺谷七菜子の世界——飯田龍太 351

現代俳句全集 六

装幀
前川
直

友岡子郷集

■友岡子郷ともおかしきょう（一九三四〜）

昭和九年、神戸市に生まれた。本名・清。甲南大学文学部国文科卒業。松蔭女子学院（中高）教諭。

二十九年、大学図書館で長谷川素逝の『ふるさと』を読み、疎開児童として過ごした少年期の記憶をよびさまされ、句作への関心を抱いた。ラジオ神戸（倉橋弘躬選）へ初投句、つづいて「ホトトギス」「六甲台」「青」「かつらぎ」等へ投句。当時、阿波野青歌指導の「神戸新人会」にも出席し、学生俳人たちと交流、「関西学生俳句連盟」を結成したが、まもなく停滞。その中の親しい仲間と共に「椰子会」をつくって、研鑽の場とし、四十三年以降「椰子」刊行。三十三年より十年間、「青」の編集を担当。波多野爽波に師事。三十八年、第六回四誌連合会賞受賞。四十三年、飯田龍太の「雲母」に移り、四十九年に同誌同人。五十二年、第一回雲母選賞を受賞。

初期の作品は、所謂客観写生を踏まえつつ、シンプルな都会的感性を示したが、しだいに社会的な諸経験を内に沈潜し、自然観照を深める方向へと向かった。「柳散る直路直歩のかなしみ湧き」「走馬燈草いろの怨流れるる」「白き風韻きて真夜に覚めしなり」などの作品がある。

〔著書〕合同句集『実』（昭34）句集『遠方』（昭44）

遠方（昭和31—43年）

着けばすぐ船旗に島の青あらし
餅花や沖の真闇を灯が通る
芽木太し年少教師顔赧^{あか}らむ
学ぶ少女に苺の連想など愉し
省みて教師は汗の目をつむる
朝禱や馬追が来て翹みだす
空蟬を指にすがらせ餉の禱り
落ち林檎山羊の鼻孔のやさしさよ

南紀大島 三句

航待つ間春のかもめと木箱殖ゆ

島はこの鯨油づくりを春の臭
青麦や軋る厠は舟さながら
嬰この枢一寒雀日あび過ぐ
運ばるるオルガン無韻冬禽とりらに
凧の野もややに青草胃の軽さ
春夜零時鈴懸なほも雫垂る
一飛燕禱りこそ地に近きもの

長崎平和公園

命ひとつぶ平和像下に光る蜂
無給助手青いちぢくの葉影あび
明日は雪溪攀よじむむ林檎直ぐなる柄え
母と歩む一月公孫樹ただ高し

小吏の父寒鳩らにもこの日なた
聖夜劇準備も萩に点燈す

北木島三句

そそる石山水仙ひとむら海を聴き
海一碧石材立てて風除に
沖から吹く烈風餅の杵外れず
卓に白墨立て教へ子と夏嶺な恋ふ

島原

叛意の色キリシタン墓地濃き夕焼
冬すみれ往きは日が透く主婦の籠
止むを知らざるものつばくろと鉄路光
尾の切れも幼きつばめ海に船

木曾馬籠 二句

水担いて彼岸の空へ山路継ぐ
花桃の昼間みごもり思ひ深げ
児を抱いて泳げり波の間まの揺藍
遠方測り知られず舷で林檎みがく
一信も来ずオリオンは寒き函

信濃 七句

隣家の馬めざめて松虫草明るし
馬 匂 ふ 待 宵 草 の 母 の 刻とき
夏ひばり太幹ばかり葬家囲む
遺影涼し林中を牛の斑ふが移り
喪章たたむ林道の口濃き桔梗

青信濃鐘鳴るときも踏切越す
無碍むげの詩こそ泉うちより水拳こぞし
鉛筆で太字の起稿風の雲雀
迅ときつばめ背後の目など忘れ去る
未婚の夏過ぎぬ木馬の緋の手綱
口笛ひそと冬川に糺浮きひろがり
寒禽の森函はと型がたの明るさあり

奥三河花祭 四句

峡空の凍て日輪に鬼面嵌はむ
寒き歌ぐら泥に倒れて息絶えしと
いつか寒暁吹く笛に涎ひかり
峡空に一白煙の花祭なの果て

笛吹川三句

母は流れき川べの障子灯の蒼つぼみ
とほき神隠し夕日の雪解川
屍かばね運びしごとし日永の瀬に戸板
愛は小さな鞭音えにしだ夕風に
夏柑一つかなしみ音おん叉さの確かさにて
橋燈一連涼しや瞳ることなき日も
灯をかざる煙突ぶだうを餉に加ふ
展翅に似て教壇に秋の日をこぼす
冬樹を招く晚餐卓布手でひろげ
母の日の雲眼前の樹をよぎる
梢えだでうすれる薄倅の雲蝸牛